

# 教 頭 会 報

栃木県公立小中学校教頭会  
 発行者 渡 邊 順 一  
 編集 広 報 部

— も く じ —

◎巻頭言 …………… 1	◎特色ある学校 …………… 18
◎第60回関プロ新潟大会 …………… 2	◎地区だより …………… 19
◎第57回県教頭会研究大会 …………… 3	◎ひろば・編集後記 …………… 20
研究大会分科会報告 …………… 4～17	

## “SDGs”を意識した経営

宇都宮市もったいない運動市民会議 会長  
 上陽工業株式会社 代表取締役 上野 勝弘

### 巻 頭 言



昨今、「SDGs（エスディー・ジー・ズ・Sustainable Development Goals・持続可能な開発目標）」という言葉をよく見聞きするかと思います。国連が2015年に採択し、2030年の未来像として掲げられた17ゴール・169ターゲットの地球社会の共存戦略です。身近なところでは、2022年4月開通に向けて整備が進められているLRT事業を含む“コンパクトシティ構想”や、約15年に渡り市民団体と連携して継続的に推進している、ひとやものを大切にする“もったいない運動”などを柱として活動している宇都宮市の先進的な取組が高く評価され、日本経済新聞社“全国SDGs先進度調査”では、京都や北九州に続く第3位、そして令和元年7月には、内閣府から選定される「SDGs未来都市」にも選ばれ、首相官邸にて内閣総理大臣から宇都宮市長に選定証が授与されました。

21世紀に入り、社会環境の変化が劇的に早まり、企業経営においても、顧客が企業価値を測る要素として、従来の業績重視ではなく、環境（Environment）・社会（Social）・企業統治（Governance）、つまり「ESG投資」が重視されると共に、倫理感・道徳を意識したエシカル商品購入や就職先選択に社会貢献度を重視するミレニアル世代の台頭により、SDGsへの積極的な取組は、企業規模に関わらず、現実的に避けられない状況になってきています。経営者にとっては、当然のように社会環境の変化に適応した“まっとうな危機感”を持った「SDGs経営」が必要不可欠となってきているのです。

今後は、教育の現場においても学力ばかりを重視するのではなく、常にSDGsにある17ゴール・169ターゲットを意識した指導カリキュラムを、早急に組み込む必要があると思います。現実的に立ちはだかる教育現場のすべての問題は、何らかのカタチでSDGsの目標に当てはまるはずで、貧困、飢餓、健康、教育、差別、水、エネルギー、経済、産業技術、格差、まちづくり、生産消費、気候変動、海、陸、平和、パートナーシップなど、一見、直接的に関係ない目標に思えても、我々の日々の生活のどこかに当てはまるはずなのです。そして、目標から分類された具体的な取組事項を、素直に受けとめて、当事者意識を持ち、愚直に行動することが求められているのです。

地球温暖化による豪雨・森林火災・熱波・突風などの世界的な気候変動や溢れるプラスチックごみなどの環境問題、貧困やジェンダー・人種差別などの人権問題、企業の不祥事や情報漏洩などのガバナンス問題など、次から次へと日々尽きない問題ばかりで、今や対岸の火事では済まされない事象が、地球上のいたるところで発生しています。

我々は、社会に育てられた者の責務として、常に“バックキャストिंग”つまり“目指す社会に向けて、今やるべきことを真剣に考えること”を意識して行動すべき義務があると考えます。

なぜならば……すべては“地球からの借り物”なのだから……。

#### SDGs（持続可能な開発目標）17の目標

- 1 貧困をなくそう
- 2 飢餓をゼロに
- 3 すべての人に健康と福祉を
- 4 質の高い教育をみんなに
- 5 ジェンダー平等を実現しよう
- 6 安全な水とトイレを世界中に
- 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8 働きがいも経済成長も
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任つかう責任
- 13 気候変動に具体的な対策を
- 14 海の豊かさを守ろう
- 15 陸の豊かさを守ろう
- 16 平和と公正をすべての人に
- 17 パートナリシップで目標を達成しよう

## 第60回 関ブロ新潟大会

### 第60回関ブロ新潟大会全体会に参加して

宇都宮市立国本中央小学校 大森 信二



第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会全体会が、令和元年11月7日(木)新潟市民芸術文化会館にて盛大に開催された。大会を記念し、講演会では、地元新潟県出身の天体写真家で天文イラストレーターの沼澤 茂美 氏から、「驚異の天体現象～あなたの知らない世界～」と題した貴重なお話をいただいた。

沼澤氏は、新潟県神林村（現在の村上市）出身で、幼少の頃からきれいな星空を目にし、天体に強い関心を抱いていた。小学5年頃、雑誌に載っていた望遠鏡の作り方を参考に自ら天体望遠鏡を製作し、本格的に天文学の勉強を始めた。絵画は、中学生の頃友人と競い合いながら夢中になり腕を磨いた。高校卒業後、設計事務所に就職するも強い閉塞感に苛まれ2か月で辞め、建築イラスト関係のアルバイトをしながら夜間学校で学ぶ。その後、プラネタリウム関係の会社が、天体の知識に富み天文の写真やイラストに精通している人を募集しており、沼澤氏が採用された。講演会は、演題「驚異の天体現象」のとおり、天体現象の詳細な説明と、世界各国の天体ショーを撮影した際の貴重な写真や映像を交えた内容であった。特に、流星群や皆既日食、金環日食を取材した際の映像は、その場にいるような臨場感を漂わせるとともに、会場にいる全員が世界各国を旅行しているかのような感動を覚えるものであった。過酷な自然環境、予測不可能な状況下での役割を長年にわたり務められた実績と豊かな経験から、「チャンスは一度きり、逃さない綿密な準備が必要」「どうにもならないことは素直に受け入れる」など、多くのご教示をいただいた。ユーモア溢れる沼澤氏の話と感動的な映像等に終始圧倒され、約90分間の講演会は盛況裡に幕を閉じた。

### 関ブロ新潟大会 提言発表を終えて

那須烏山市立七合小学校 田島 弘行

11月7日、8日の2日間にわたり、第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会が新潟市で開催されました。

栃木県を代表し、南那須地区小中学校教頭会が、第3(3)分科会「PTA及び地域社会に関する課題」に関して、研究主題を「地域や家庭の変化に対応したPTA・地域連携活動の実践」、副主題に「学校・家庭・地域間のつながりを深める実践をとおして」とし、提言発表しました。

発表は、本地区のそれぞれの学校でPTAの組織及び運営、地域との連携について洗い出された課題と改善するための実践例、教頭の関与の様子や成果についてを整理し提言しました。

発表後のグループ協議では、「PTA活動の創意工夫によって、保護者のPTAへの参画意識を高めるためにはどうしたらよいか」、「PTA活動や地域連携を持続可能なものにするにはどうしたらよいか」の2つを分科会の柱立てとして協議がなされ、各都県のPTA活動や地域連携の状況や課題等の意見交換が活発に行われました。

指導助言では、「地域や家庭の変化に対応したPTA・地域連携活動の改革は学校だけではできない。コミュニティ・スクールの組織を活用し、『熟議』をとおして実践するとよい」などの貴重な助言をいただきました。

今後も、社会に開かれた教育課程を実現し、PTAや地域社会と連携協働できる学校づくりを目指すため、持続可能な改革をしていきたいと思っております。



# 第 57 回 県 教 頭 会 研 究 大 会

## 強い組織に不可欠なフォロワーシップ

講師 公益財団法人 日本ラグビーフットボール協会 リソースコーチ  
Work Life Brand 代表 二ノ丸 友 幸 氏

令和元年度の流行語大賞に輝いたのは、「ONE TEAM (ワンチーム)」。ラグビーワールドカップ2019日本大会期間中、試合の開始時刻に合わせて早めに退勤する職員が増えたとか…。にわかファンがこれほど増えるきっかけとなった強い日本代表チームをどのように育ててきたのか、それを知ることのできる素晴らしい講演会でした。以下、講演内容の一部を紹介します。



日本人は、言われたことをきちんとこなす粘り強い民族性をもっています。ただし、それをこなしているだけでは強い組織にはなれません。今までの成功体験や価値観を生かすことができない「先の読めない時代」がやってきています。固定観念を捨て、柔軟に発想を変えて物事を見て判断していく必要があります。講演会の中で出題されたクイズを解く体験をすることで、その必要性を実感することができました。また、その時代を生き抜くためには「自考動型人材」を育成していかなければならないとのことでした。「自考動型人材」とは、“今何をすべきかに気付き（フォロワーシップ）”、先を読み、主体的に行動する人、その時々状況に合わせて機転を利かせ臨機応変に対応できる力を備えた人です。

今まで教師は良かれと思い子どもたちに様々なことを教え込んできました。しかし、ラグビーにおいて管理（ティーチング）のみを受けてきた選手は言われたことしかできません。これに対して育成（コーチング）を受けてきた選手は、自ら気付いたことを基に判断し行動することによって成長できたのです。常に主体的に行動し、考える習慣が身につけているからです。日本がワールドカップベスト8に輝く活躍ができたのは、このことと「ONE TEAM (ワンチーム)」として強い組織力を誇る日本人の良さを結びつけるという秘密があったのです。

二ノ丸先生にはこれからの教育界に必要な考え方をお示しいただき、新しい時代の幕開けにふさわしい講演会となりました。  
(文責：宇都宮市立清原北小学校 村松 保子)

## 研究大会に参加して（来賓・助言者案内接待の運営）

宇都宮市立中央小学校 石 井 圭 子

研究大会当日の役割は、来賓や指導助言の先生方、講師の先生のいらっしゃる時間や部屋の準備を担当の先生方と確認し、控室までご案内・接待を行うことでした。目に見えないところで事務局の先生方が細やかに支えてくださり無事役割を果たすことができました。

本研究大会を開催するまでには数回の会議、打ち合わせ等の準備がありました。事務局の先生方、教頭会会長を始め役員の先生方はもとより、分科会に携わる多くの先生方からは、学校、教育現場をより良いものにしていこう、有意義な研究大会にという情熱を強く感じました。研究大会運営の一つの役割を担うこと、大会を成功させるためにたくさんの先生方と協働する機会を頂けたこと、大変貴重な体験をさせていただきました。先生方とのつながりを大切に、研究大会での経験や学びを今後にかかしていこうと思います。

## 分科会に参加して

宇都宮市立横川西小学校 竹 澤 昭

第3(1)分科会「施設・設備及び事務に関する課題」では、「ICT機器の有効活用における教頭の役割」として、1年次に実施したICT環境整備の実態調査を受けて取り組んだ2・3年次の研究の概要が発表されました。第3(2)分科会「教育行財政に関する課題」では、「安心・安全な学校づくりを目指して」として、2年間の研究を受けて取り組んだ改善策の実践報告と研究のまとめが発表されました。発表後のグループ協議では、各取組における教頭のかかわりについて活発な意見交換がなされました。最後に助言者より、校内で共有化された取組が、学校間、市内間等に共有化されていくことによって、教育効果の向上や教職員の負担軽減につながり、持続可能な取組となっていくことが考えられるとの指導助言をいただき、有意義な分科会となりました。

# 研究大会分科会報告 豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育

## 第1 A・B分科会 教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助言者 栃木県教育委員会事務局義務教育課副主幹 青木 孝浩 先生

### 社会に開かれた教育課程を目指して —地域とともにある学校づくりにおける教頭の役割—

提言地区 宇都宮・上三川地区 小学校副校長会

### 地域と共に生き未来を担う子供の育成 —地域の教育力を生かした教育課程の研究—

提言地区 下都賀地区 中学校教頭会

#### 1 提言趣旨

##### (1) 宇都宮・上三川地区

##### 小学校副校長会

##### ア 主題設定の趣旨

これからの時代に求められる教育を実現していくためには、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという社会に開かれた教育課程の実現が重要である。

そこで、カリキュラム・マネジメントを行っていく上での教頭としての役割や具体的ななかかわりについて研究を進めることとした。

##### イ 研究の概要

##### ① 1年次：平成29年度

各学校における取組の現状分析と今後の課題

##### ② 2年次：平成30年度

実践結果の検証と考察及び焦点化

##### ③ 3年次：令和元年度

課題を踏まえた取組の更なる改善と考察

##### ウ 成果と今後の課題

- ・メディアの活用により特色ある活動を効果的にアピールできた。また、教職員や児童のモチベーションも上がり、より意欲的な取組となった。
- ・地域との良好な関係は不可欠であり、地域人材の発掘にもつながった。
- ・夏休み等の課題とリンクさせ、家庭を巻き込むことで、意欲の高まりと深い学習につながった。
- ・新学習指導要領の理念に照らし、教育課程上の見直しや年計の改善等が必要である。
- ・外部人材主導となる活動についても、学習のねらいに迫る手立ての工夫が必要だ。



##### (2) 下都賀地区

##### 中学校教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

学校と地域が連携し、共に教育力を高める方策を模索し、将来の地域を担う人材を育成していく事が大切であると考え、本主題を設定した。

##### イ 研究の概要

- (1) 「地域の教育力を生かした各校の取組」について、現状を把握し改善点を検討するために、これまで行われてきた活動を洗い出した。
- (2) 地域の要望をより把握して連携に活かすために、地域の方を対象としたアンケートを実施し、その結果から、情報の発信方法を工夫した。
- (3) 地域の教育力を生かした教育課程をどのように編成するか、その手立てについて考察した。

##### ウ 成果と今後の課題

- ・地域を知るために、アンケートは有効である。
- ・地域教育力を活用することで、日常の授業では学べないことを学ぶことができ、生徒にとっては有意義な体験になる。
- ・カリキュラムマネジメントにより校内体制を再構築することで、様々な障害を克服することは可能である。
- ・地域連携教員の負担を減らす手立てを考える必要がある。また、地域コーディネーター等の人材確保が課題である。
- ・地域の行事の日程や内容を把握し、教育課程や学校の活動との調整を図り、可能な限り中学生を地域に帰す努力が大切である。

## 2 グループ協議内容

### (1) 3 班

- ねらいが明確化になることで活動がスムーズになる。ねらいを明確化するには事前の打合せが重要だが、時間の確保が難しい。
- 地域の教育力を生かすことは地域を取り込むこと。地域の方々に学校に来ていただくだけでなく、地域に出て行き、生徒に学びの場を提供するという視点も重要である。
- 自分が勤務する地域の強みや地域が学校に何を求めているかを分析したり、子どもたちが地域に戻りたいと思う魅力を探したりすることも必要である。
- 教育課程上の位置付けと働き方改革や負担感の軽減が課題となる。

### (2) 5 班

- 学校が合併すると、幅広くボランティアが集まるよい面もある。反面、いろいろな考えがあり、ねらい達成を絞って活動することが難しいこともある。
- 地域連携教員と地域教育コーディネーターと担任の連携はうまくいっているがボランティアにねらいを理解してもらえないこともある。伝えることの難しさを感じる。
- 地域連携教員が学級担任をしていると大変なことが多い。地域連携教員と教頭の役割や仕事の軽重を考えて対応する。
- 地域によって、求める情報伝達の手段が違う。回覧板がよい地域もあれば、ホームページがよいときもある。学校の様子を発信することは大切である。

### (3) 9 班

- 学校のニーズと地域のニーズを調整するのが教頭の役割である。また、年間計画や活動計画の進捗状況の確認も重要である。
- 地域によって、共働き家庭が多くボランティアが集まらないとか、コーディネーターがいないとか、学校が戸惑うくらい活動的なコーディネーターがいるとか、生涯学習課のコーディネーターが対応しているとか、様々な状況があり、それぞれに課題がある。
- 教育課程においては、様々な事業をどのように年間計画に位置付けていくかが悩みである。
- 教職員の異動後も事業が継続できるように、活動計画を残すなど、教育課程編成に教頭が関わっていくことが重要である。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

- 特色ある活動を成功に導くためには、教頭の力（連絡・調整、情報発信・提供、保護者等への啓発活動）が重要である。
- ねらいの明確化を図り、児童に学びの保障がなされているか、ボランティアと担任との間で趣旨の共有ができているか、専門性の高い地域の協力者との良好な関係を築くとともに、新たな人材の掘り起こしを進めているか等を、常に考える必要がある。

### (2) 提言Ⅱについて

- 活動前後におけるアンケートの実施はとても効果的で、特に中学校区においては有効である。
- 働き方改革との矛盾点もあるが、教頭、地域連携教員、地域の指導者それぞれの負担感をどう解消するかも検討してほしい。
- 情報発信の方法としては、地域の実情を踏まえるとともに今の時代に合わせることも大切である。



### (3) まとめ

- 学校と地域が互いに『貸し借り』の関係になっていないか。それぞれが第三者的視点でなく当事者意識をもち、対等な立場で双方向性を重視する必要がある。そのためには、『熟議』を重ね、『協働』して活動するとともに、学校が組織として力を発揮するための『マネジメント』力を強化していく。（参照：「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ）
- 教育課程上の見直しに関しては、総合的な学習の時間や特別活動だけに固執するのではなく、教科横断的な視点での見直しが大切である。
- 教育課程上の見直しにおいては、新学習指導要領における資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）を常に意識するとともに、学校教育目標との整合性を考えることが重要である。
- 栃木県は地域連携教育が進んでいると他県は見ている。自信をもって取り組んでほしい。

（記録：田沼 広志・秋山 貴子）

## 社会に開かれた教育課程

－学校と家庭・地域が教育目標を共有・実現するための教頭の関わり－

提言地区 那須地区 大田原A教頭会

## 地域や家庭の変化に対応したP T A・地域連携活動の実践

－学校・家庭・地域間のつながりを深める実践をとおして

提言地区 南那須地区 小中学校教頭会

### 1 提言趣旨

#### (1) 那須地区

大田原A教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現するためには、学校の教育目標や目指す子ども像を家庭・地域と共有し、連携して教育活動に取り組んでいく必要がある。そこで、私たちは教育目標等を家庭や地域と共有する方法や目標を実現する方策などについて研究したいと考え、この主題を設定した。

#### イ 研究の概要

本年度は、2年次までの課題であった「小中一貫教育とコミュニティ・スクール」を有機的に結び付けるべく調査研究を進めた。

#### ㍿ 調査内容

##### ①中学校区で学校運営協議会

- ・縦軸で小学校・中学校の9年間を通して育てていこうとする小中一貫教育
- ・横軸で家庭・学校・地域が協働で育てていこうというコミュニティ・スクール

##### ②教頭の関わり

#### ウ 成果と今後の課題

- ・義務教育9年間の教育目標を明確化し系統性を図ったカリキュラムを作成することや保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度は時代に即した制度である。教頭はリーダーシップを発揮し、教育目標や目指す子ども像を家庭や地域と共有、連携して取り組んでいる。
- ・調整や組織マネジメントなど教頭の主体的な取組が今後も必要である。



#### (2) 南那須地区

小中学校教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

現在、学校を取り巻く環境は難しい課題を数多く抱えている。

そこで、学校教育の基盤である地域や家庭そのものも大きく変化する中で、その変化に柔軟に対応

しながら、保護者や地域と連携した活動をどう工夫・改善し、家庭や地域の教育力をどのように高めていくのかを研究したいと考え、本主題を設定した。

#### イ 研究の概要

本地区のそれぞれの学校で、P T Aの組織や運営、地域との連携について洗い出された課題と、改善するための実践、教頭の関与のようすや成果についてまとめた。

- ・課題1 交流を深める主体的なP T A活動  
「親子学習」「親学習プログラム」
- ・課題2 P T A組織の改編による活性化  
「地域全体によるP T A組織の改編」
- ・課題3 地域の人材活用と支援体制の活性化  
「地域の伝統芸能を守る取組」

#### ウ 成果と今後の課題

- ・地域や家庭の変化や変容を促し、P T A活動や地域連携活動を実施することができた。教頭が、実態等を把握し、教職員の十分な理解が得られるように働きかけることにより、結びつきを深め、学校の教育活動全体の活性化につながった。
- ・さらなる活性化を図るために、学校と保護者、地域間で連携・協議する体制をどう継続していくかが課題である。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰについて

- 学校運営協議会の実施には、地域差がある。大田原市のように中学校区で1つの学校運営協議会をもっている地区、各学校ごとに学校運営協議会をもっている地区、従来の学校評議員制度の学校と様々である。教頭は、会議、団体、地域などとの調整役である。
- 連携する学校数が多く地域が広がると、各校の実態が異なるので統一を図ったり保護者や地域に理解してもらったりするのが難しくなる。
- 学校教育目標や教育方針等を家庭や地域と共有する方法には、保護者会での説明、学校便り・学年便り・リーフレットの配布、情報配信メールの活用、学校ホームページの開設などが有効である。教頭として、社会に開かれた教育課程を今後さらに進めていく。
- 学校評価を実施し、家庭や地域に返し理解してもらっている。評価項目を中学校区もしくは市で共通に作成している地区は、比較がしやすくなる。集計を外部委託している地区もある。
- 教頭が進んで地域に入っていく、学校の様子を伝えたり話をしたりすることで、学校への理解、信頼を高めてもらえる。また、地域の意見や要望を吸い上げることもできる。
- 地域人材が充実して活動しているが、その調整には時間や手間がかかり、働き方改革とのバランスや児童生徒にとって何が大切かなどを考えていく必要がある。

### (2) 提言Ⅱについて

- P T A、地域連携活動の活性化のために、教頭は、つなぎ役・調整役になったり、地域行事へ積極的に参加したりしている。
- 地域とのつながりを大切にするには、学校の担当（特に教頭や地域連携教員）の役割が大きい。夜の会合や休日の行事への参加など、働き方改革に逆行する活動になる。行政がもっと関わってくれるとよい。
- 学校と地域は、相互にとってWIN-WINの関係を保てるとよい。
- 地域の行事やボランティア活動などP D C Aをうまく利用し、学習指導要領に照らし合わせて考え見直し、時にはスクラップしていく活動もあってよい。
- P T A活動を活性化するために、活動の見直し、組織の編成など教頭がマネジメントしている。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

- 平成29年の地教行法改正を受け、平成30年度から全中学校区で小中一貫教育及びコミュニティ・スクールを導入した。それらを生かした本研究は、時代の流れに乗ったタイムリーな研究と言え、他地区に情報提供してほしい。
- 組織面では、委員に地域コーディネーターを必ず入れる、スクールアシストプランを活用するなど、既存の力を最大限に生かして、地域と学校をつないでいる。
- 学校運営協議会の下部組織として4部会を設置し、この組織を生かして、学校評価等のP D C Aサイクルをよく回している。
- 自治会長や公民館長を学校運営協議会の委員とすることで、地域とのネットワークも強化されている。



### (2) 提言Ⅱについて

- 親子活動を保護者に主体性をもって運営してもらったり、親学習プログラムでは参加型の学べる活動を取り入れたり、保護者の交流や当事者意識を高める活動になるよう工夫している。
- P T A組織については、地域の人数の変化により、不公平感や役員選出方法の不満などが出てくる。多くの同意が得られるような形に、みんなと一緒に考えていくことが必要である。
- 地域人材の活用については、組織が不十分のため単発の活動になりがちである。実践事例では、小中高校を舞台に、地域の伝統芸能を継承する取組が継続した活動になっている。後継者育成という地域の願いと学校の願いが合致して、WIN-WINの関係となっている。
- 地域を含めたチーム学校をつくるためには、管理職が外に開かれていなければならない。管理職のリーダーシップが大切である。

(記録：助川千恵子・岡安 明子)

## 第2 A・B分科会 子供の発達に関する課題（小学校・中学校）

助言者 宇都宮市立陽北中学校長 樽井 久 先生

### 知・徳・体の調和のとれた子供の育成に向けた教頭の役割 —子供の発達を学校と地域が支える小中一貫&コミュニティ・スクールの推進—

提言地区 下都賀地区 Bブロック小学校教頭会

### 小中連携による9年間を見通した健やかな子供の育成について —小中連携の成果と今後の展望—

提言地区 佐野地区 小中学校教頭会

#### 1 提言趣旨

##### (1) 下都賀地区

##### Bブロック小学校教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

現在、学校や地域がそれぞれの特色を生かし、子供たちの育成を支えていく必要がある。そこで、本市の取組を活用することで、支えることができると考え、この主題を設定した。

##### イ 研究の概要

以下の点について、研修会で各校の取組状況について情報交換しながら、教頭の役割について確認した。

- ①栃木市小中一貫教育&コミュニティ・スクール
- ②小中一貫教育のマネジメントについて
- ③小中一貫教育の具体的推進について
- ④コミュニティ・スクールについて

##### ウ 成果と今後の課題

- ・市全体の教育政策として進められている「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の意義や内容を積極的に理解しようとする事ができた。
- ・市内他校の教頭と多くの協議を行い、実践上の悩みや疑問の解消を図ることもつながった。
- ・教頭が担ってきた人と人をつなぐことが、子供たちの健全育成にとても有益であると認識できた。
- ・教頭は他の教職員より時間外勤務が長い為、教頭自身の働き方改革を進め、時間対効果での成果をあげて行かなくてはならない。



##### (2) 佐野地区小中学校教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

小中一貫教育はより質の高い学校教育を実現していくための手段として期待されている。そこで、小中学校間の連携を子供の発達の視点から見直し、教頭としての関わりを検討することで、より組織

的・効果的・効率的に推進できるようにしたいと考え本主題を設定した。

##### イ 研究の概要

これまでの小中学校連携の取組を考察し、課題の吟味を行った。また、「小中一貫教育の推進に関わるアンケート結果」による取組の成果と課題から、教頭としての関わりについて研究した。

##### ウ 成果と今後の課題

- ・グランドデザインにより目指す子供像を共有することで、身に付けさせたい資質・能力について系統化を図って整理することができた。
- ・小中一貫教育を進める上で、小中連携にも力を入れたことにより、中1ギャップの解消に効果を上げている。
- ・特別な教育的支援が必要な児童生徒について個別の指導計画・個別の教育支援計画等の活用により、児童生徒への理解を深め、小中学校で一貫した指導ができるようになった。
- ・個別の指導計画などの取扱いや児童の情報などについて、特別支援教育コーディネーターと教頭が連携を図り、保護者との信頼関係を保ち、小学校の指導を中学校につなげていく必要がある。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰについて

- ・教員間の温度差があるので教頭会や職種ごとの部会の設定の機会を設ける。少人数での情報の共有が大切となる。情報の共有ができていないことや伝達されていないといった課題がある。このように環境を整えるのが教頭の役割であり、小中一貫教育の第一歩となる。
- ・アシストネットの活用で毎日のようにボランティアが来校していることは子供たちにとってもメリットがある。様々な形での協力があるが、学校の現状の点で地域の理解が必要である。
- ・行政の後押しがある学校支援ボランティア活動の栃木市のシステムは有効である。コーディネーターの配置を教頭として行政と連携して行い、地域に発信していただくことが教頭の役割と考える。教員の負担感があまりなく、展開できるように教頭が教職員の理解を深めさせるとよい。

### (2) 提言Ⅱについて

- ・教頭同士が連携して教頭会を開いたり、小中学校の同じ職域で会合を行ったりする機会をもつなどすると情報の共有化が図れるのではないかと。
- ・学校内の環境整備を行い、情報が確実に伝達できるようにしておくことが大切なのではないかと。
- ・9年間を見通して学力向上を図るために、習熟度別学習を行うと効果があると思うが、その場合いつ頃から行うとよいのか保護者の理解も得ながら検討する必要がある。
- ・特別な支援が必要な児童についての引継ぎは、6年担任だけでなく、学校全体で取り組むことが必要である。
- ・小中連携は、課題もあるが進めなくてはいけないと感じている。
- ・小中学校の教職員が、顔を合わせて日常的なコミュニケーションが取れるようになっていく。気になった時に気軽に電話で話せる関係づくりができるよう、教頭が学校間をうまくつないでいく必要がある。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

- ・教育行政の構築した小中一貫教育についての運用は教頭の役割である。教頭としての手腕の見せ所でもある。まずは校長の意をよく理解し、地域の方や教職員にどのように分かりやすく伝えるか。そのためには、話し方、適切な資料の準備が必要となる。学校の良さ・地域の良さ・子供の良さ・PTAの良さなどポジティブな要素をたくさん披露し、皆さんで頑張りましょうという雰囲気を作りあげると良い。
- ・地域の方と話すときにはよく吟味をして、どの人とどの情報を交換するか冷静に判断する必要がある。さらに、教頭一人が説明するより、その分野の校務担当者に説明させるのが良い。多くの人材を活用した方が組織力も見せられ、説得力が増す。教頭としての役割は人をつなぐ役割を生かす。話し手が満足感を得られるように気を遣う必要がある。



### (2) 提言Ⅱについて

- ・特別な支援が必要な児童生徒が増える中で、小中連携により、進学や転校時にスムーズに対応できるようにするという視点は、大切なことだと思う。
- ・中学校での生徒のトラブルに対し、小学校の低学年や中学年の頃の記録がなくて困ることも多い。情報が蓄積されるようにしておいてうまくつながれるとよいのではないかと。
- ・小学校での指導の失敗事例や、保護者への対応の仕方などについても情報が伝えられるようにするとよい。9年間を見据えた小中一貫教育なので、小学校での教育を引き継ぎ、中学校の3年間でより良い方向につなげていけたらよい。
- ・様々な課題をもつ児童生徒や家庭に対して、多くの方々の協力を得て、小中一貫教育を進めていくことが必要なのではないかと。

(記録：近藤 睦・青山 恵子)

第3(1)分科会 施設・設備及び事務に関する課題（合同）  
 第3(2)分科会 教育行財政に関する課題（合同）

助言者 栃木県教育委員会事務局義務教育課副主幹 阿久津浩久 先生

## ICT機器の有効活用における教頭の役割

－効率的なICT環境整備のために－

提言地区 上都賀地区 小学校教頭会

## 安心・安全な学校づくりを目指して －自らの命を守る安全教育のための体制づくり－

提言地区 那須地区 那須塩原市黒磯地区教頭会

### 1 提言趣旨

#### (1) 上都賀地区 小学校教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

本地区では、ICT環境整備の学校間格差が大きく、国の第2期教育振興基本計画で目標とされている水準にはほど遠い現状がある。また、児童数に比べ学校数が多いことから、限りある予算での整備を考え、効率的な環境整備に向けて地区全体で取り組んでいくため本主題を設定した。

##### イ 研究の概要

本年度は、3カ年の総括として、これまでの研究結果を大きく3つの項目にまとめた。

- (ア) 環境整備のねらいや方向性の共有
- ・ ICT環境整備の指標ダイジェスト版の作成
  - ・ ICT機器に関する事項のチェックシートの活用
  - ・ 各校の整備、活用状況の情報共有化
- (イ) 上都賀地区の学校における様々な取組
- ・ 文書收受システムや校務フォルダの活用
  - ・ ICT活用のための職員研修
  - ・ 情報モラル教育に関する講習会
  - ・ 授業での活用例
- (ウ) 外部と連携した取組
- ・ 近隣高校との連携
  - ・ 地域ボランティアの活用
  - ・ 研究助成金の活用
  - ・ 行政との連携

##### ウ 成果と今後の課題

- ・ ICT環境整備に関する教頭の意識向上が図れ、外部と連携した取組などにより教職員の資質能力の向上と児童、保護者の意識向上が図れた。
- ・ 市教委など関係諸機関と情報共有、連携が引き続き必要である。



#### (2) 那須地区那須塩原市 黒磯地区教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

児童生徒の安全・安心を確保し、健全な成長を目指すためには、日頃から様々な事態に備えたシステムを構築するなど、学校の安全体制を整えることが重要である。そ

こで、教頭として安全体制推進のためにどのような働きかけができるのかを調査・研究し、実践を通して明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

##### イ 研究の概要

本年度は、2年次までの成果を市内の小中学校へどのように広めていくか、また、持続可能な取組とするにはどのようにすればよいか、行政や地域等と連携を図るため教頭として取り組むべき方策について以下の2点について研究した。

- (ア) 教職員ネットワークシステムを利用した情報共有
- (イ) 地域の防災訓練への参加

##### ウ 成果と今後の課題

- ・ 引き渡し訓練や防犯・防災教育に関する職員研修等の実施校が増え、各学校で安全教育に対する意識を高めることができた。
- ・ 教頭がコーディネート役を果たし、行政や地域と連携を図ることにより、人的・物的な支援を受けることが可能になった。また、地域と学校が課題等を共有することで、地域全体で課題解決に向けた具体的な実践を行うことができた。
- ・ 新たな危機事象に対応するために、諸機関と連携を図り、教頭会で情報を共有することで、常に最新の体制づくりを行っていく必要がある。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰについて

#### ○ICT環境整備について

- ・市によっては、市教委に情報推進係が設置され、教頭が窓口になって整備を行い、電子黒板が全教室に設置され、全教師にタブレットが配布されている。また、大型テレビが1台のみという学校もあり、現在、市町村による格差が大きく、ICT環境整備については、過渡期である。
- ・TV会議システムは小規模校には有効である。

#### ○校務支援システムについて

- ・校務分掌のフォルダが市内の小中学校で統一され、情報共有のできるサーバーがあるのは、校務支援に役立っている。
- ・文書收受システムは、提出文書の確認ができる。締め切りの遅れが減った。
- ・校務支援ソフトについては、市全体で統一され効果的に活用されている市もある。現在、導入のために検討中の市も多い。

#### ○情報モラル教育について

- ・子ども向け、保護者向けの講座が必要である。聞いてほしい状況の保護者ほど参加が難しい。また、教員にも情報モラルの研修が必要である。

### (2) 提言Ⅱについて

#### ○登下校の安全について

- ・小学校はスクールガードの協力を得ている学校が多い。しかし、スクールガードの高齢化、活動の形骸化等が課題である。スクールガードを解散し、新たに組織を立ち上げた学校もある。
- ・メールの活用については、便利であるが適切な使用方法についても検討していきたい。

#### ○訓練について

- ・各学校とも防犯・防災に関する訓練を実施しているが、内容や回数は様々である。土砂災害や水難に関する訓練を実施している学校もあった。学校の実態に合わせ、教頭があらゆる災害等を想定して訓練の計画を立てる必要がある。
- ・市町全体で避難訓練を実施しているところもある。地域と合同で訓練することで、地域住民と顔見知りになり、避難所開設時にも役立った。
- ・引き渡し訓練についても、あらゆる災害等を想定し、様々な方法で実施する必要がある。

#### ○危機管理意識の高揚

- ・危機管理マニュアルの見直しを適宜行い、職員に周知し共通理解を図ることで、職員の危機管理意識を高めていくことが大切である。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

#### ○ICT環境整備について

- ・ICTの環境整備には、児童生徒の教育支援、校務支援、働き方改革などの面がある。システムを構築し、維持管理するには、大きな労力が必要だが、市全体に広げることで効果が広がり、労力は減る。
- ・授業においては、ICT活用は、目的ではなく教科のねらいを達成するための道具であるという点に留意してほしい。「効率化を図るため」「個別の調べ学習をシェアするため」など授業者が使い方を工夫する必要がある。また、そういった情報も共有することがカリキュラムマネジメントを行う上で大切なことになる。
- ・今後、整備を進めながら、足りない部分をはっきりさせて、実際の数値、実情を元に市に働きかけるのが有効である。



### (2) 提言Ⅱについて

- ・安心・安全な学校づくりを推進していくためには、地域との連携・協働が必要である。その際、教頭という立場は欠かせない存在である。
- ・地域と連携し、安心・安全な学校づくりを具体化していくためには、まず、現状を知ることが大切である。そこからどのように組織として取り組んでいくのか役割分担を明確にし、マネジメントしていくのが教頭としての役目である。
- ・地域との連携を持続可能なものとするには、Win-Winの関係を保つことが大切である。
- ・次年度から順次、新学習指導要領が実施されていくが、防災教育は東日本大震災の影響を受けて強調されている。例えば、理科学習の中でも気象、火山、地震の学習をするが必ず災害についても扱うこととなっている。特別活動や保健体育でも災害から身を守る内容が入ってくる。児童生徒が自分自身で身を守ることができるようにすることが重要となっている。
- ・今回紹介された防災プログラムのような教材が、県内で共有できるようになるとよい。

(記録：蟹澤 尚只・和田 淳子)

助言者 小山市立小山第一小学校長 池澤 満 先生

## 組織・運営の活性化に係る教頭の役割 —教職員の指導力・協働性・意欲の向上を目指して—

提言地区 足利地区 小中学校教頭会

## 学校組織の有機的な運営を目指す体制づくり —組織力の向上に視点をあてて—

提言地区 上都賀地区 中学校教頭会

### 1 提言趣旨

#### (1) 足利地区

##### 小中学校教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

急激な社会の変化や価値観の多様化、さらに働き方改革に伴い、学校が取り組むべき課題も多岐にわたっている。それらの課題に効果的に対応するには、学校がこれまで以上に組織的に機能していくことが重要である。そこで、学校における組織・運営を活性化させるため、教頭が教職員にどのように関わるべきかについて研究したいと考え、本主題を設定した。

#### イ 研究の概要

学校において、組織・運営を活性化させるために学校が取り組むべき課題を「教職員の指導力・協働性・意欲の向上」の3視点で捉えた。そして、これらの実現を図るために「教頭としての4関与」（知的関与、情的関与、働的関与、物的関与）を意識しながら、どのような場面でどのような関わり方をすべきかを考え、研究実践を進めた。

#### ウ 成果と今後の課題

- ・OJTを意識した教頭の関わりは、各年齢層の学習指導力向上への行動を意識化させた。
- ・若手、中堅、ベテラン教職員が、役割を自覚し、互いに高め合う関係性が生まれ、学校全体の体制づくりにつながった。
- ・自主研修は、授業の空き時間や放課後の話合いの時間確保が難しい。教職員の多忙感を増幅しない在り方を今後も検討したい。



#### (2) 上都賀地区

##### 中学校教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

子供たちを取り巻く環境が、複雑化・多様化している現代社会において、学校は家庭や地域と協働し組織的に対応していくことが求められている。力強く未来を生き

抜く子供の育成を目指して、教職員が互いに関わりを持ち、影響し合えるような有機的に機能する組織づくり・運営のために、教頭としてどのような働きかけができるのかを研究したいと考え、本主題を設定した。

#### イ 研究の概要

本地区は、社会環境の変化に伴い様々な実情を抱える学校が多い。それぞれの実態に応じた取組の事例から、有機的な運営や体制づくりの工夫、教頭の関わりを考えた。

- 1) 働き方改革の推進と組織力の強化
- 2) 人材育成と組織力の向上
- 3) 小中連携と組織力の向上

#### ウ 成果と今後の課題

- ・事例を通して教頭の果たす役割を分析できた。
- ①個人や集団を意図的につなぎ、有機的に運営されるような働きかけにより、組織を維持し育てる役割（連絡・調整）
- ②校長の意を受け、適切な職務を割り振り、人材を育てていく役割（人材の把握・育成）
- ③課題の把握と目標設定
  - ・職員構成を考慮して組織力を上げる工夫や、職員間の話し合いの時間の確保等について更に研究を深めることが課題である。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰについて

- ・活性化の視点が明確で、4 関与も整理されていてわかりやすい。関与の意図を意識してバランスよく実行することが大切だと思った。
- ・メンターとメンティについて、関ブロでは関係性が難しいとの報告もあったが、やってみる価値はある。モチベーションの低いベテランには、教頭として、具体的にこの部分を指導してほしいと指示しながら、若手に指導法等を伝授させ、時代に合わせていくようにさせる。
- ・若手の困り感をアンケートで捉えて、アドバイスすることが参考になった。
- ・若手の先生方がそのときの指導がとても役に立ったと答えているので、すぐにできる取組がありがたいと感じていることがわかった。
- ・若手の中で、若手を引っ張っていけるリーダーを育てる。ベテランは若手に仕事を任せ、バックアップしていく。
- ・若手が入ることで自然と活気が出ている。ベテランの意欲を上げるのは難しい。教員のベクトルを合わせるには、うまくベテランをコントロールしていく力が教頭として必要である。
- ・ミニ研修、レジェンド講座など、ベテランを褒めて得意分野で力を発揮してもらおう。
- ・教頭として、若手とベテランをつなぎながら、場の設定や時間の確保を行うことが大切だ。
- ・組織づくりにじっくり取り組みたいが、時間的に難しい面もあり、さらに検討が必要だ。

### (2) 提言Ⅱについて

- ・働き方改革の取組は難しく、特に「定時退勤」は試行錯誤である。校長・教頭の協力の下、よりよい方法を模索していきたい。
- ・業間や昼休みを使ったミニ会議など時間を生み出す工夫が必要だと思った。
- ・組織力の向上において、教頭は調整役として大切な役割を担っていると感じた。個々を認め、核となる人材を育成していくことが大切。
- ・ノー残業デーの実施は難しいが、チームの一員という意識で、マイペースの仕事を見直すことにもつながる。
- ・業務改善の取組として、会議のペーパーレス化、回議をペーパーレスで行っている学校も。会議の精選や運営方法、週案の提出など、各校で様々な取組をしている。
- ・小中一貫の取組は課題も多いが、メリットもあ

る。特に中学校の教員が小学校へ来て授業をすることは効果的であると感じる。

- ・時間の確保を考えながらの業務改善は難しいが、様々な事例が大変参考になった。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

- ・組織運営の活性化のために、研究の3 視点を挙げ、教頭の4 関与と、その際に足利のLANシステムを活用した情報交換・共有がされ、時代を反映した取組である。
- ・若手とベテランの二極化が多く見られ、教頭の関与性を発揮して、それぞれの持ち味、強みを生かしたOJTを推進していくことが大事だと思った。また、メンター方式は有効な手段だと思う。
- ・教頭の役割の一つに後進の育成があるが、同時に働き方改革の先頭に立っていかなければならない現実問題がある。そこで、業務の質と量の充実を図ること、同じようなねらいなら行事等を統合することも必要である。
- ・小中一貫の視点から、合同研修や相互交流等が継続的な取組となるよう、教頭の知的、情的関与が見られた。
- ・多くの成果が確認されているが、時間の確保、多忙感の問題がある。教師にいかん意欲を持たせられるかが大事である。



### (2) 提言Ⅱについて

- ・業務改善について、定時退勤日の設定は、仕事に対する意識や姿勢の見直しに大変有効であり、全校で取り組む意味がある。行事の削減については、安易に「やめる」ことの危険性も考慮する必要がある。保護者・生徒・地域との合意形成が大切である。
- ・テーマ別のチーム会議は、次期リーダーの育成として有効。教頭の役割として、話し合いの流れや方向性を示すことは大切である。
- ・小規模校の実践は、一見弱みと思える学校の特徴を強みにかえる地域の実態に即した実践である。学校の実態を踏まえて、弱みを強みに変える、バランスのひずみを埋めていくことが教頭の役割である。(記録：大森 順子・中山 由美)

助言者 宇都宮市立一条中学校長 初谷 憲一 先生

## 教職員の資質・能力の向上を図る教頭の在り方 －協働する教職員組織を目指して－

提言地区 塩谷地区 矢板市教頭会

## 教職員の授業力向上を図るための教頭の役割

提言地区 芳賀地区 郡市小中学校教頭会

### 1 提言趣旨

#### (1) 塩谷地区

矢板市教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

協働する教職員組織を目指し教頭がリーダーシップを発揮することが求められる。2年間の研究を具現化し、教頭としてどのように関わることが効果的であるかをさらに考察していきたいと考え、本主題を設定した。

#### イ 研究の概要

次の3つを研究の柱として設定した。

- ・意欲と資質・能力を高める教職員評価に教頭としてどのように関わるか。
- ・教職員の資質・能力を高める校内研修に教頭としてどのように関わるか。
- ・組織の活性化と組織マネジメントに、教頭としてどのように関わるか。

#### ウ 成果と今後の課題

##### (ア) 成果

- ・資質・能力の向上につながる教職員評価を効果的に機能させることで、教職員が協働しやすい雰囲気が醸成されている。
- ・校務分掌を生かした校内委員会や各部会等で主任やミドルリーダーが新たな発想と視点で提案し校内研修に向かうなど組織の活性化が学校経営の一助となっている。

##### (イ) 課題

- ・多忙感の解消やマンネリ化の打破、校内研修充実などの課題に対し、質の高い教職員組織の確立が求められる。



#### (2) 芳賀地区

郡市小中学校教頭会

#### ア 主題設定の趣旨

新学習指導要領に明記されているその時代に求められる資質・能力を身に付け確かな学力を育成するためには、授業改善等の推進が必要である。そこで、教師の授業

力が向上し校内組織の活性化を図るためには、教頭としてどのように関わるとよいのか、その方策について研究したいと考え、本主題を設定した。

#### イ 研究の概要

本研究3年目である今年度は、中学校の教頭は昨年度作成し実践した教頭の役割（関与表として一覧にまとめた）の成果と課題を踏まえて改善策を立案し実践した。また、今年度は、小学校の教頭も関与表を作成し実践してきた。義務教育9年間の学びの連続性を視野に入れ、小中合同の本組織を生かして各校の取組を共有し研究を進めてきた。

#### ウ 成果と今後の課題

- ・関与表を作成し実践したことにより、教頭が主体的に関与して授業力向上に取り組む体制づくりが確実に進んだ。
- ・小学校教頭も研究を共有し、関与表を作成し実践した。小学校の授業力向上にもつながった。
- ・教頭としての職務の在り方が明確化し、合わせて、教職員の専門性を生かす取組が活性化した。
- ・関与表の実践から、各校で取り組んだ方策についての成果と課題をPDCAサイクルで見直し、改善・工夫していくことが必要である。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰ

- ・ミドルリーダーを意図的に育成することが急務である。ベテラン教員と若手教員を組み合わせたり、積極的に役割を与えたり次のステージを意識させることが大切である。
- ・校長の学校経営方針を、各教職員が理解し、協働していくことが大切である。そのために、教員一人一人への言葉かけが大切である。
- ・日頃からの教員の観察、指導助言が求められる。定期的に授業参観を行ったり、一人一授業を計画したりすることも教頭の役割である。
- ・校務分掌について、年度初めだけではなく、年度途中の見直し・改善も大切である。また、チームで対応することも効果的である。
- ・教員が、安心して勤務できる雰囲気づくりが求められる。風通しのよい職員室づくりは、教頭の大きな役割である。
- ・教職員評価制度については、管理職が評価について共有し、同一歩調で進めて行く。励みとなって、資質向上につながるようにしたい。

### (2) 提言Ⅱ

- ・教頭の関わりを示した関与表の作成や実践内容が参考になった。教頭の職務の指針になった。
- ・授業改善が喫緊の課題。一人年間1回の研究授業・授業研究会を実施することは効果的。時間を生み出せるように教務主任を指導する。
- ・学力調査の成果と課題や改善策の検討を全校体制で実施するように学習指導主任を指導する。
- ・地域連携教員に地域連携コーディネーターと連携させ、地域人材活用を促進させる。学校支援ボランティアの登録の見直しや更新が必要。
- ・校内研修を中学校区の他小学校にも公開できるように働きかける。参加側の時間の調整が必要。
- ・学校の縦割り授業はよさと難しさがある。小学校も教科担任制を実施している学校がある。
- ・教頭自身が率先して授業改善に取り組み、全校体制での取組を助長し、教職員に助言を行う。
- ・教職員評価制度により、学力向上への取組を目標成果シート項目と連動させる。また、授業振り返りシートを活用して、授業を振り返らせる。
- ・OJTとして日々の研修を若手教員の育成と中堅・ベテラン教員の資質向上に生かす。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰ

- ・教職員評価については、具体的な指導助言が大切であり、結果が見える支援をしていきたい。また、常日頃からの観察を心がけ、自信をもって一人一人の教員を見てほしい。
- ・校内研修では、外部との連携を図り進めたい。そこで教頭の調整力を発揮していくとよい。また、時間の確保についても、工夫が求められる。
- ・組織マネジメントについては、まずはPDCAが機能しているかチェックしたい。学校評価の結果を生かすなど、生きる評価として活用する。
- ・教員一人一人のやる気を高めていくことは教頭として大きな責務である。まずは、「褒める」こと、いいところを見つけて伝えることが必要である。数字として見えない仕事にもきちんと目を向け認めることがやる気につながる。
- ・研修時間の確保については、会議の在り方を見直すことが必要である。内容の見直しや実施の有無など効率的に進めたい。

### (2) 提言Ⅱ

- ・教科の授業を縦割りにして時間割に教科部会を位置付けた縦割り授業は、実践してみるとすばらしく、効果がある有意義な取組である。
- ・昼休みや放課後の短い時間を活用し、職員室の空きスペースで立ったまま教科部会を開くスタンドサブジェクトミーティングは、短時間でポイントを絞って実施でき、企業でも効果が実証されている有意義な方法である。
- ・研修や会議を実施するために水曜日の日課を工夫するなど、知恵を絞って工夫し、いかにして研修の時間を作っていくかが大切である。
- ・中堅やベテランなどそれぞれのキャリアや教職員一人一人の得意分野を生かし、若手教員の育成を図るOJTを工夫する。
- ・PDCAに基づく課題改善の話合いの場の設定は教頭の仕事である。
- ・要請訪問を他校に公開することは有意義。参加できるよう調整するのも教頭の仕事である。



(記録：関 一浩・大越 恭子)

助言者 益子町立益子小学校長 高島 俊一 先生

## 子供をめぐる危機管理体制の在り方

### －学校現場がかかえる現状と課題－

提言地区 宇都宮・上三川地区 小学校副校長会

## 社会とともに力強く生き抜く子供の育成を目指して

### －専門性に基づく「チーム学校」体制の構築における副校長・教頭の役割－

提言地区 宇河地区 中学校副校長・教頭会

#### 1 提言趣旨

##### (1) 宇都宮・上三川地区

小学校副校長会

##### ア 主題設定の趣旨

食物アレルギーやいじめ、児童虐待の問題等、児童を取り巻く様々な危機に迅速かつ適切に対応し、学校が本来あるべき安全・安心な場と教育を提供するためには、より確実に実践的な危機管理体制の構築が必要である。そのための教頭の取組を明らかにするために、本テーマを設定した。

##### イ 研究の概要

食物アレルギーや感染症等の健康に関する問題、及びいじめや不登校・ネグレクト等の児童虐待の問題への対応について、各校の危機管理体制の現状と課題を洗い出し、改善に向けての検討・実践を行ったり、それらを再度検証し改善を加えたりして、その成果と課題について考察した。

##### ウ 成果と今後の課題

- ・予防対策と発生時の対応力強化、意識改革の重要性に加え、学校と児童、保護者、地域が一丸となった危機管理体制の整備の必要性を確認した。
- ・地域や関係機関との連携を強化する上で教頭のコーディネート力が鍵となることを再認識した。
- ・教職員一人一人及び保護者や地域の意識を高める取組をこまめに行うことが重要である。
- ・常に体制を見直す意識をもち、校内にとどまらず関係機関等との連携に努めるとともに、教頭として、危機を予測し未然に防止する先見性と洞察力等、危機管理の力量向上に努める必要がある。



##### (2) 宇河地区

中学校副校長・教頭会

##### ア 主題設定の趣旨

現在、学校で起きている複雑化・多様化している諸問題に対応するためには、教職員以外の専門家や地域の人材を活用した学校のマネジメントを強化し、組織として取

り組む指導体制すなわち「チーム学校」体制を整備することが不可欠である。そのために、教頭の役割は何かを明らかにしたいと考えた。

##### イ 研究の概要

教職員評価制度の「目標・成果自己評価シート」に勉強会の企画や参加といった目標を設定させたり、事務職員、SC、MS等専門スタッフを含めた教職員全体で授業を参観・協議する校内研修を行ったり、教職員の特性の背景を分析し、共有しつつ、職場内での自己有用感を高める手立てを講じたりすることで、より効果的なOJTを行うことができることを確認した。

##### ウ 成果と今後の課題

- ・「チーム学校」体制構築のための様々な課題に対する方策を提案することができた。
- ・「チームとして」連携・協働して教育に当たることの重要性・有用性を再認識することができた。
- ・外部人材が学校の方針等を理解した上で活動に至るよう筋道を付けることが難しい。
- ・教職員を孤立させず、関係者間で十分なコミュニケーションをとることができるような資質・能力の育成のために副校長・教頭は尽力せねばならない。

## 2 グループ協議内容

### (1) 提言Ⅰについて

- ・臨場感をもたせたシミュレーションやロールプレイングによる対応訓練等、多種多様な校内研修をコーディネートすることが重要である。
- ・自考型人材を育てる訓練の導入が必要である。
- ・地域学校園での共同研修を行うとよい。
- ・報告・連絡・相談体制を整えることにより、一人で問題を抱え込むことがないようにする。
- ・組織的対応ができるよう、ポイントとなる仕事を適材適所に割り振る。
- ・ベテランと若手を組ませて育てる。
- ・新聞記事等、実際に起きた問題を提示し、最悪の場面を想定させることで、危機意識を高める。
- ・危機管理意識の個人差を小さくするために、具体的な場面を示し、責任の所在を考えさせる。
- ・マニュアルの実践的活用を可能にするために、市内小学校のマニュアルを読み合わせている。
- ・年度当初の見直しだけでなく、日々見直しを行うことが重要である。
- ・事案発生後の振り返りを行い、次に生かす。
- ・教職員だけでなく、全児童生徒によるAED講習を実施することで、学校全体の意識を高める。

### (2) 提言Ⅱについて

- ・異動のサイクルが短く、引き継ぎが難しかったり、校務分掌に若手とベテランを組み合わせさせて配置しても機能しなかったりする場合は、教頭がリーダーシップを発揮し、問題解決をしている。
- ・「引き継ぎシート」はとても参考になった。
- ・校務分掌が地区内の全学校で統一されている。利点はあるが、実情に応じた工夫がしにくい。
- ・教職員評価制度の活用は、ミドルリーダーの育成及びチームが機能するために必要である。相談しながら評価項目を決めるとよい。また、定期的な進捗状況の提出により効果を確認しやすい。
- ・授業研究会で若手の先生が指導助言を行うことで、効果的な研修になるよう工夫している。
- ・若手教員の技能・意欲向上のため、マイスター制度として、中堅教員の授業を若手に参観させる。若手がベテランに相談しやすい雰囲気作りをベテランに意識させる役割を教頭が担う。
- ・ベテランと若手の二極化を解決する有効な方法がOJTである。経験値の違いから、固定観念が邪魔しないように、それを壊す大切さを感じる。
- ・教頭の仕掛けにより、学級担任を固定せず、一週間交代で担任を回す取り組みをしている。

## 3 指導助言

### (1) 提言Ⅰについて

- ・(どちらの提案も) 3年間の成果が表れ、参考になる発表内容であった。
- ・各校の状況が異なる中での情報交換は、有意義なものとなったことと思う。
- ・危機管理においては、最悪を想定し、いかに速やかに、適切に対応できるかが何よりも重要であり、不変の課題である。
- ・危機を回避するために欠かせないことは多い。実践的な危機管理マニュアルの策定も、もちろんその一つである。しかし、最も大切なのは「人」である。人の心にどれだけ寄り添えるか、相手の立場に立って、どれだけ気持ちを想像できるかが重要だ。その気付きが行動につながっていく。発生を予測し未然に防止する洞察力や、危機発生時の対応力を目指した取組とともに、このことを忘れずに意識の高揚を図ってほしい。

### (2) 提言Ⅱについて

- ・OJTの例には色々あるであろう。先ほどの発表したことも、その後グループで話したこともそうであらう。



- ・基本的な考え方としては、二つのことが大切である。一つは、教職員の風通しをよくしておくこと。もう一つは、児童・生徒の小さな変化を見逃さない事である。
- ・小さな変化を見逃さないためにも、我々は感性を磨く必要がある。子どもから何気なく聞いたことに問題を感じたときには、最悪のことを考え、情報を収集し、その真偽を確かめていただきたい。
- ・SCの面談後の日報からSCMが不審な点をキャッチして、管理職に報告をし、そこから本人が普段どうなのか、気になる点はないのか、引き継ぎ事項に何かあったかなど情報を集め、真偽を確かめながら関係機関と相談しているといった実例がある。ちょっとしたつぶやきをいかに読み取り、最悪を想定してどうするか考える上で、先ほどの二つのことを意識し、校長はもちろん、全教職員と意思疎通をしながら「チーム」として取り組めるよう、尽力していただきたい。

(記録：吉田 茂興・橋本めぐみ)

## 縦割り班活動

宇都宮市立国本西小学校 吉田 晋

本校は、学校周辺に田園地帯が広がり、西には多気山や鞍掛山などの山並みに囲まれた自然豊かな環境です。南には、大谷観音や平和観音等の歴史遺産や名勝があり、長い歴史と伝統に培われてきた地域です。

本校は、児童数が63名と宇都宮市内で最も少ない小規模校であることから、田植え、稲刈り、収穫祭など、1年生から6年生までの全児童で取り組む縦割り班活動がいくつかあります。

田植えは、本校で20年以上続く毎年の恒例行事で、全児童が参加して行います。今年の田植えは、5月13日に、地元の農家の方やJAうつつのみや青年部会員の方のご指導やPTAのご協力のもと、約8ヘクタールの広大な学校農園で餅米の苗を植えました。

6年生は、初めて田植えを体験する1年生の手を取り、ペアを組んで苗を植えました。この日植えた苗は、9月下旬に稲刈りをし、11月に土曜授業として行われる収穫祭で餅米をふかし、餅つきをして味わいます。また、学校農園で育てた野菜を10月下旬から11月に収穫し、収穫祭で児童が火をおこして、大鍋で「新里汁」を作ります。「新里汁」には、農園で収穫した地元の特産品である新里ねぎ、里芋、白菜、大根、蕪などが入っており、校庭で全校生一緒に食べるのはとてもおいしいです。



本校では、田植え、稲刈り、収穫祭の他にも、全校生で宿泊する臨海学校や全校生と一緒に食べる全校児童ランチルーム給食など、縦割り班を単位とした活動があります。また、郷土クラブの子供たちが宮祭りや披露する宗門獅子舞や3～6年生が取り組む鼓笛隊の活動など、長年にわたり取り組まれている活動もあります。それらの活動を通し、今後も思いやりの心や助け合い協力し合おうとする態度を育てていきたいと考えています。

## 青少年赤十字（JRC）活動を通して

真岡市立西田井小学校 上野 正人

本校は、戦後間もない昭和24年（1949年）に青少年赤十字に加盟し、現在も様々な活動を行っています。青少年赤十字は、「児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人びととの友好親善の精神を育成することを目的として、さまざまな活動を学校教育の中で展開する」ものです。



現在本校では、JRCの3つの実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」を念頭に、「よい子の日」活動と「VS（ボランティア・サービス）」活動などを実施しています。「よい子の日」では、①登校時の空き缶拾い、②募金、③ペットボトルキャップや書き損じ葉書、使用済み切手の回収などの活動を、毎月2日間実施しています。「VS」活動は、「個人VS」、「学級VS」、「親子VS」の3種類があります。「個人VS」は、毎日の生活の中で、まわりの友達に対して思いやりのある行動を実践するものです。「学級VS」は、各学級のみinnで力を合わせてできる、やや大がかりな活動の実践です。昨年度は、学区内にある駅の構内やその周辺のクリーン活動や、共生型医療福祉複合施設での高齢者との交流会などをしました。「親子VS」は、冬休みに、親子で考えた活動を実践するものです。昨年度は、地域の公民館やお寺、神社などの清掃活動やごみ拾いを行いました。活動を通して、親子で地域について考える時間がもてると好評でした。



今後もJRC活動を充実させ、思いやりの心をもった、主体性のある児童の育成を目指していきたいと思ひます。

## 誰もが役員という環境の中で

南那須地区小中学校教頭会会長 小野里 俊 文

南那須地区教頭会は、那須烏山市、那珂川町の小学校8校、中学校4校の12校12名で組織されています。年4回の全体研修会を開催し研究課題を中心にした研修を行っています。本地区の特徴は、なんと言っても12名という少人数なので、市町の役員、県の理事・専門部員には誰もが必ず名前を連ねます。そのことで、会の運営や県教頭会のことについては他地区の方よりもはやく理解できる環境にあります。

本会では、研究テーマ「地域や家庭の変化に対応したPTA・地域連携活動の実践」とし、3年目のまとめとなります。本地区のそれぞれの学校で、PTAの組織や運営、地域との連携について洗い出された課題を改善するための取組と実践、教頭の関わりを中心に研究を進めています。内容的には、「親子活動」や「親学習プログラム」の実施、PTA組織の改編や役員選出方法の改正、地域の伝統を守る取組における教頭の関与についてです。教頭が、保護者の学校への願いや要望、地域の実態を把握し、教職員の十分な理解が得られるように働きかけることにより、学校と家庭・地域との結びつきを深め、学校の教育活動全体の活性化につながる事例を発表します。

今年度は、関プロ新潟大会での発表もあり、県の研究大会も含めしっかり準備を行っています。さらに、働きやすい環境づくりについても教頭会として研究を進めていきたいと考えています。



## 義務教育学校の開校

佐野地区教頭会副会長 山 口 英 樹

佐野地区教頭会は小学校26校、中学校9校、附属中学校1校の合計36名で構成されています。会員は研修部、調査部、表簿作成部、厚生部に分かれて活動をしています。専門部の活動の後は、小学校と中学校に分かれ、小学校はさらに大中小の規模別に分かれ、情報交換会をもっています。

来年度は、戸奈良小、三好小、山形小、閑馬小、下彦間小、飛駒小、田沼小の一部と田沼西中が統合され、あそ野学園義務教育学校が開校します。令和4年には、葛生小、葛生南小、常盤小、氷室小と葛生中、常盤中が統合され、葛生義務教育学校が開校します。義務教育学校では教頭は2名体制となりますが、会員数は減少することになります。

佐野市立小中学校適正規模・適正配置基本計画(後期計画)が出され、各地区で説明会がもたれました。それによりますと、今後40年間で約1400人の小中学生の減少が見込まれています。また、築35年以上の校舎が全体の9割あり、老朽化が非常に深刻化しています。さらに、適正規模基準に合致しない学校が見られ、今後複式学級が見込まれる学校があります。逆に基準を超える大規模校があったりします。大規模校を解消するために通学区域規則で指定された以外の学校へ通学している小中学生が多く見られ、育成会や町内活動へ影響が出ている地域も見られるそうです。そこで、これらの課題を解決するために、すべての小中学校を施設一体型の義務教育学校に再編することです。現在35校ある小中学校が9校の義務教育学校に再編されるのです。現時点では、令和5年度から令和29年度までの25年間で計画されていますが、社会情勢、地域の実情、財政状況などにより、適宜見直すとのこと。さらには、複式学級の解消を目的に小学校の段階的な統合についても検討を進めるとのことです。

今後学校数が少なくなっても、佐野市教頭会として、佐野市の子どもたちの生きる力を育むために力を注いでいきたいと思ひます。

### 義仲寺参拝記

栃木市立東陽中学校 鈴木 龍一

今夏全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会に急遽参加する機会を得た。大津を訪ねた経験はなく、亡き父母が愛唱した琵琶湖周航の歌を思い出した。初日全体会会場から宿泊先にバスで戻ろうとするも、ロビーは既に長蛇の列。然程の距離でもなからうと歩いて戻ることにした。1時間以上歩くこととなり後悔したが、途中「義仲寺」に出会した。既に閉門、参拝は叶わなかったが、心躍った。「骸は木曾塚に送るべし」芭蕉は遺言通りこの寺に葬られた。翌日分科会后、脱兎の如く義仲寺を目指し駆けた。既に閉門の準備をしていた管理の女性に、時間があまりないが、それでもよいかと念を押され、是非にと拝観させていただいた。こぢんまりとした境内に朝日将軍源義仲の墓、その右隣に芭蕉翁の墓、左隣に巴塚があった。閉門の時間となり表に出ようとした私に、かの女性は問う「翁堂は見ましたか」と。外からのみと答えると、「天井には若沖の花弁の図があります。まだ大丈夫ですから」と教えてくれた。お礼を言って、境内に戻り翁堂の中を伺うと、正面に芭蕉翁の木像、左右には三十六俳人像の額、天井には若沖の描いた花があった。寺務所脇の芭蕉の大きな葉の緑が鮮やかだった。琵琶湖周航は逃したが、義仲寺参拝は忘れられぬ思い出となった。

### 旅行

那須塩原市立波立小学校 奥山 幸満

「趣味は何ですか？」と聞かれれば、旅行と答えると思う。中学2年生の頃、富士登山のため電車に乗っていたときのことである。車窓を眺めていて「いろんなところに人は住んでいるんだ。それぞれに、いろんな生活をしているんだろなあ」と感じたことが、旅好きになった原点だと思う。中学生の時は、自転車で中禅寺湖に行き、高校生の時は、アルバイトでお金を貯めて鎌倉に行った。大学生では、3年生の夏休みに2ヶ月間、バイクで日本のあちらこちらを旅した。就職し、結婚してからは、専ら家族旅行になった。子どもが小さい頃は、茨城の海が主だったが、大きくなるにつれ年に2回くらいは、遠出するようになった。特に気に入ったのは、沖縄の景色である。最近は、景色を楽しむというより、その土地のおいしい物を食べるのが楽しみとなった。そして、新幹線・バスの移動が多くなってきた。お昼からビールが飲めるからである。夏休みには、那須塩原市の教頭会で、山形・新潟方面に1泊のバス旅行に出かけた。天候にも恵まれ、気心知れたメンバーで、楽しいひとときを過ごさせていただいた。

旅には、いろいろな形態があるが、これからも自分に合った旅行を楽しんでいきたい。

### 山に魅せられて

足利市立第一中学校 島田 眞津美

4年前富士登山をした。3776mの剣が峰に立ち、「今、日本で一番高いところにいるのは私だ。」と悦に浸ったり、ご来光の神々しさや天の川に感動したりした。

しかし「山の装備を一式そろえてしまったので、もったいないから続けるか。」というのが正直なところであったが、今ではまんまと山登りにはまり、筋トレをする日々。

こんな事もあった。南アルプスの甲斐駒ヶ岳から北岳を見て、「来年はあの頂きに立つ。」と決心した昨年。山小屋まで予約したのに、台風で北岳行きを断念して甲府駅前でもつを食べて帰ってきた今年。人は自然の猛威に勝てない。そういうときに、いつもつぶやく『山は逃げない。』

アルプスもいいけどご近所山も悪くない。うちの学校の裏山天狗山は地元では有名な場所。ザックに天狗山の木札をじゃらじゃら付けている人が足利界限には多い。毎月1日に行くと木札が手に入ると知り、9月1日(日)に行ってみた。「どこから来たの。」「9時半には来いよと言ってるんだけどね。」狭い山頂に30人はいた。ボランティアで毎月お札をつくってくる人がいて、登山道を整備してくれる人がいて、毎月1日に登ってくる人がいる。裏山にこんなコミュニティがあるのかと気づき、また山に魅せられた。

### 編集後記

「令和」の時代になり半年が経ち、台風で延期になった「祝賀御列の儀」も11月10日に快晴の下行われました。テレビでは天皇皇后両陛下の晴れやかなお姿とそれをお祝いするたくさんの人々の様子が映し出されました。教育界も新学習指導要領実施に向けて新たな時代を迎え、心新たに取り組んでいきたいと思えます。

第50号は、第57回研究大会の報告を中心に編集いたしました。少しでも会員の皆様の参考になれば幸いです。末筆ながら、お忙しい中原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

(青柳)